

提

言



大原幽学の教えを 現代の協同組合運動に生かす



糠谷真里子

大原幽学記念館 学芸員

ぬかや・まりこ／1985年千葉県生まれ。大正大学人間学部人間福祉学科卒。大学卒業後、千葉県内博物館勤務を経て、2023年より現職。大原幽学や、千葉県旭市周辺の歴史や民俗について調査研究。特に現在、国内有数の農業産出額を誇る旭市の農業をはじめ、漁業・畜産業の礎として活躍した人物たちの功績を広く紹介することに力を注ぐ。

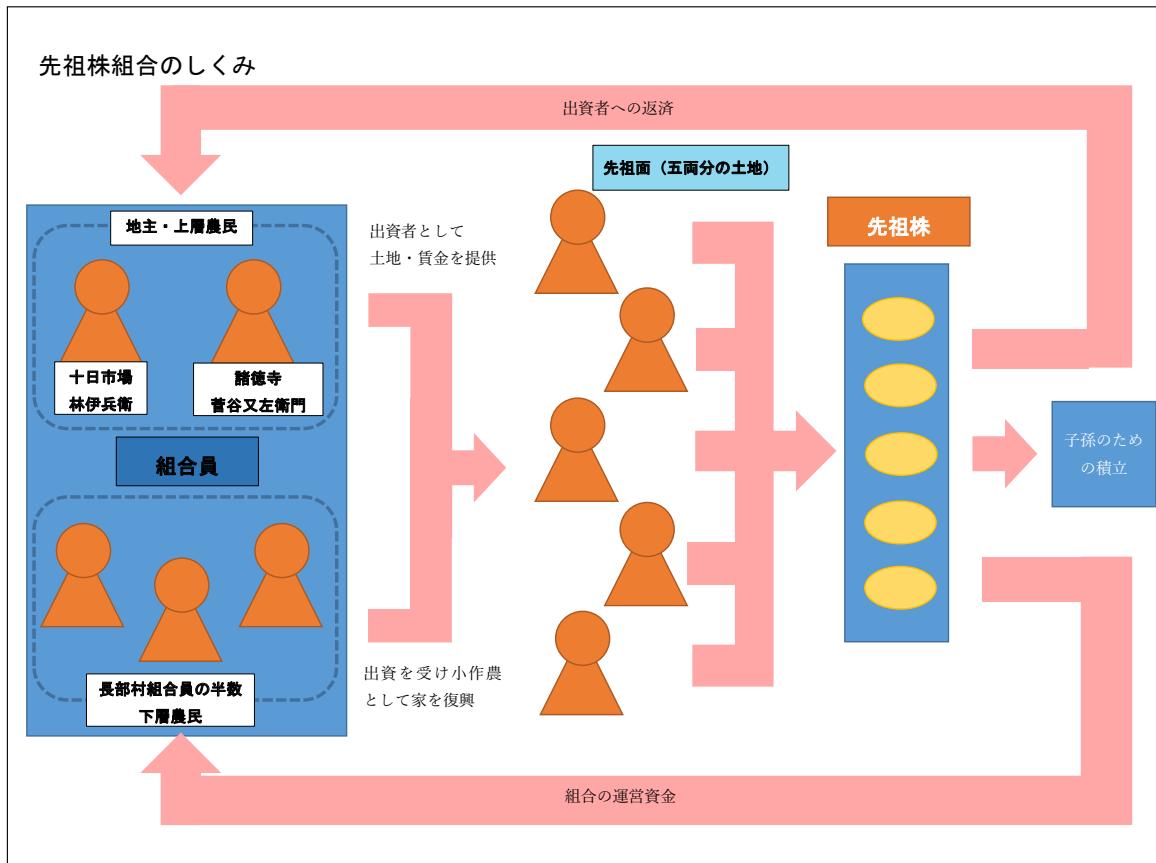


大原 幽学(1797年～1858年)は農業協同組合の原型となる先祖株組合を立ち上げた

江戸時代末期の農村指導者で、世界で初めて農業協同組合をつくった人物として知られる大原幽学。千葉県旭市にある大原幽学記念館には、幽学が1区画1反(10アール)の長方形に耕地整理をした田んぼが今も残っている。村の復興に尽力した幽学の実践から、現代の協同組合運動に通じる考え方を探る。

■ 協同組合の源流となった先祖株組合

大原幽学は江戸時代末期の混乱した世相の中、下総国長部村(現千葉県旭市長部)を中心に房総の各地をはじめ信州上田などで、農民の教化と農村改革運動を指導し、大きな事績を残した人物である。「先祖株組合」と呼ばれる相互扶助組織の結成や共同購入など、現在の協同組合に通ずる仕組みを実行したことで「世



上／先祖株組合は、地主や上総農民から農地の一部を提供してもらい組合の共有財産とした。ここから得た利益を子孫のための積立として農村復興に活用した

右／大原幽学(1797年～1858年)は農業協同組合の原型となる先祖株組合を立ち上げた

界最初の協同組合」と評され、日本の協同組合の歴史を語るうえで、初めに名前があがる一人となつた。



江戸時代というと、ずいぶん

昔の話と思われるかもしれない。しかし、その世相を鑑みると、現代と同じく時代に翻弄される人々の姿が見えてくる。江戸時代後期は経済・産業が爆発的に発展を遂げた時期であった。特に大都市・江戸と利根川でつながる地域は、水運による物流網の拡大と、豊かな農水産資源を背景に、貨幣経済がいち早く浸透していくところである。利根川下流域は物質的にも文化的にも活発な地域となつたが、反面近隣の農村においては、現金収入が得られ歓楽街もある町場へと若者は流れていき、村は疲弊した。幽学が活動の拠点とした長部村も、そのような村の一つだった。しかし、幽学とともに村一丸となって農村復興に取り組んだ結果、領主から模範村として表彰されるほどの立ち直りをみせる。その原動力となった幽学の教えとはどのようなものだったのだろうか。

■ 女性や子どもへの教育の必要性

幽学は、道徳と経済の調和を基本とした独自の学問「性学」を説いた。性学は、中国古典の中庸・孝經といった儒学の考え方を中心となっている。主著である『微味幽玄考』には、次のように書かれている。

「孝を先として分相応の道をもって、家内一つに和するときは、自ら作る災いなく富めること疑いなし」

親兄弟を大切にする孝の重要性を教え、身の丈に合った生き方で家族がまとまるとき、家の継続発展は間違いない、というのである。幽学のいう「分相応」とは贅沢だけを指す言葉ではない。自家の労働力に見合った耕作規模を、予定に従って合理的、かつ集約的に經營することを主眼とする農業指導を行い、分相応を守らないのは「強欲心」と戒めた。自身の状況を正しく把握し、儒教の和と孝の考えをもとに道徳を重んじ、家の永続を目的としたのである。

幽学は、女性や子どもに対する教育にも力を入れた。女性への教育は不要という風潮の中、「女会」という講義の日が設けられていた。一家の構成員として、女性の担う役割の重要性を早くに見えていたのである。また、幽学は数え7～15歳の子どもをほかの家庭へ預け育てる「換子教育」を行った。1～2年ほどを他の家で過ごすという仕法で、数え7歳を迎えた子どもたちには「紐解心得」が渡された。その初めには祖父母や父母の喜ぶ顔を行動の基準とすることとあり、ここでも家庭を重視する教えをしている。



史跡内には幽学が耕地整理した田んぼが残されている。大きさや形の異なる田を1区画1反にまとめ、用排水路をつけて能率的に作業ができるようにした



幽学の旧宅。幽学自らが設計し、質素ながら丈夫な造りになっている

一方、親たちには「子供仕込心得」で、預かった子どもたちへの接し方を指南した。よいことも悪いことも、言葉ではなく行いや態度で示すことや、子どもを注意深く観察しその子のタイミングに合わせて手助けや教えを行うことなど、大人の子どもたちへ向き合う姿勢について指摘している。最後に「ただ情の深き家が極上なり」と結ばれ、預かった子どもに自他の区別のない愛情を注ぐことを大切にした。

■ 情を大事にして人材を生かす

幽学の言葉の中には、「情」という言葉がよく使われている。幽学は門人たちを「道友」と呼び、師弟の隔たりを設けず、「初め一とせ二年の中は、必ず先ず情を施して、その情のよく通る時に至りてのち理を学ばしむるなり」というように、まずは人との交流によって信頼関係を築き、それから教えを施した。幽学の講義の内容を記した『義論集』には、「先生にあふ時は一度々々に心ゆたかに快くただ穏やかに成りて、そのあふ度に理を知れること、眞の闇の夜に足元手元にともし火をかゝげたる如くなり」と記され、門人の心醉ぶりがうかがえる。

江戸時代の末、経済の発展により地域社会の衰退、経済格差に直面した村々が幽学の教えに光を見出したのは、その合理的で実践的な指導もさることながら、その情の深さや人づくりに重きを置く姿勢に魅せられたのかもしれない。

個人主義が浸透している現在、コミュニティの希薄化や孤立といった問題も顕在化している。その中で、組合員同士が顔の見える関係を築き、地域全体を支えあうことは必須のことであり、その橋渡しを果たせるのはJAをおいて他にない。

JA女性部の活動の意義を社会へ伝え、子どもたちへの教育活動を継続していくことも、幽学の教えに沿う重要な活動であり、家の永続、ひいては組織の持続的な発展へつながることだろう。また、それに寄り添う情の深い職員の育成も重要である。

幽学の活動した期間は、決して長くない。長部村の先祖株組合の結成から裁判が始まるまで、わずか14年ほどである。盤石な基盤と豊富な人材、そして長期にわたり組合員へ寄り添うことのできる組織としての強みを生かし、幽学が見ることの叶わなかつた協同組合のさらなる発展を見せてくれることを願ってやまない。

インフォメーション **大原幽学記念館**

大原幽学および郷土の歴史、民俗等に関する貴重な資料を収集し、展示している。

※詳細は[こちら](#)から



- ・住 所／千葉県旭市長部345-2 大原幽学遺跡史跡公園内
- ・電 話／0479-68-4933
- ・入館料／一般300円
- ・開館時間／9:00～16:30
- ・休 館 日／月曜・祝日の翌日、年末年始